

仏教ソーシャルワークの探求

○ 淑徳大学 Josef Gohori (009456)

秋元樹 (淑徳大学・000150)、藤森雄介 (淑徳大学・002911)、松尾加奈 (淑徳大学・002671)

キーワード：仏教・ソーシャルワーク・国際社会福祉

1. 研究目的

戦後しばらくの間、特定の宗教や文化とソーシャルワークを結び付けて論じることがごく一般的だったが、ここ数年、専門職としてのソーシャルワークといった部分が強調され、ソーシャルワーク方法やソーシャルワークの教育のグローバル化ともいえるべき現象がみられる。ソーシャルワーク専門職は、万能のものであるかのようにとらえられ、社会的、文化的、宗教的な側面を超越したコンセプトとして認識されているといえる。そこで、本研究では、アジアの仏教徒による実践を通して仏教とソーシャルワークの関係をとらえ直し、仏教ソーシャルワークという概念を提唱してきた。本研究の目的は、仏教ソーシャルワークの作業定義及び研究枠組みを確立すると同時に、専門職に限定されないソーシャルワークそのもののエッセンスを見出してソーシャルワークの社会的、文化的、宗教的な基盤をとらえ直すことである。

2. 研究の視点および方法

2015年以降、アジアの10以上の国と地域における仏教寺院の諸活動を対象とした調査研究(現地調査)を行い、仏教寺院が関わっている福祉活動にフォーカスしながら、地域活動、医療、教育等々の各取り組みに着眼してきた。これは、当研究チームのみならず、現地の教育研究機関及びソーシャルワークの専門機関と連携を取りながら、実施した。還元すると、イーミックとエティックの両方の目線を持ちながら、客観的な立場からの観察と分析とあわせて、内部の観点、当事者の観点を同時に活用してきた。この調査研究の成果を踏まえて、仏教ソーシャルワークの作業定義及び研究枠組みに向けて議論を深めて考察を続けてきた。なお、本発表では、現地調査の結果を取り上げながら、仏教ソーシャルワークの定義に焦点を当てる。これらを踏まえて、国際社会福祉の視点から仏教ソーシャルワークのみならず、ソーシャルワークそのものについて考察を行う。

3. 倫理的配慮

本研究では、アジア各地の現地調査において研究の対象及び研究協力者となる個人の人権の擁護が行われ、研究の対象となる者に理解を求め、研究趣旨や方法について充分説明

した上で同意が得られた。また、すべての研究活動は、日本社会福祉学会の倫理指針を遵守して実施した。10以上の国や地域にわたる現地調査については、現地の倫理規定も含めて厳守し、現地協力者の所属機関の倫理審査委員会の許可を得て実施した。なお、本研究において個人への利益及び不利益並びに危険性が生じないと考える。

本発表において、個人が特定できないよう配慮し、研究対象者の個人情報の保護等に充分配慮しながら行う。

4. 研究結果

現地調査及び考察、現地の協力者との議論を踏まえて、仏教ソーシャルワークの作業定義は、次のようにまとめることができた。「仏教ソーシャルワークとは、(他の)人々の生活(人生)の困難や課題を解決又は軽減することを助ける、仏性に根差した人的活動である。仏教ソーシャルワークは、活動(介入)の原因を常に外面(すなわち物質的及び社会的要因)と内面の両側面に求めている。仏教ソーシャルワークの基礎的な原理は、悲(karuṇā; compassion)、慈(mettā; loving-kindness)、相互扶助(利他精神)、相互依存(※共存/共生)と独立独歩(At ta hi att no natho)である。中核をなす価値は五戒である。究極目的は生きとし生けるすべてのものの福祉(※ウェルフェア、ウェルビーイング、幸福含む)と平和の達成である。

5. 考察

上記に示した仏教ソーシャルワークは、西洋生まれの専門職ソーシャルワークのコンセプトに当てはまらず、西洋生まれの専門職ソーシャルワークとは明らかに異なる部分を内包するが、本研究で注目したためアジアの仏教寺院の諸活動を通して、ソーシャルワークそのものをとらえ直すことが充分可能だと考えられる。仏教ソーシャルワークを通して、宗教、信仰、そしてこれらに基づく価値観は、アジア諸国の社会基盤を成しており、日常生活のフレームワークを形作っていることが明らかになった。この日常生活から宗教的实践やこれらを裏付ける信念を取り除くことは不可能である。同様に、文化の一部であり生活の一部である仏教を、ソーシャルワークから切り離すこともできないといえる。このパラダイムは、ソーシャルワークそのものをとらえ直し、ソーシャルワークのコンセプトを再認識する際、手掛かりになると考えられる。

※本研究は、文部科学省による私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の補助を受けて実施したものです。

※本研究の現地調査等に加わってくださったすべての現地協力者、すべての方に感謝を申し上げます。